

Data

- そらち・炭鉱(やま)のまちからの挑戦事業HP
<http://www.sorachi.pref.hokkaido.jp/yama/theme/>
- お問合せ先
空知支庁地域政策課主査(産炭地振興)
Tel.0126-23-2231



三菱美唄炭鉱立坑巻揚槽



住友奔別炭鉱立坑槽

◆住友奔別炭鉱

三笠市幾春別の空に浮かぶ四つの巨大な滑車。それぞれにワイヤを通し坑員・職員と石炭、それに資材を並行して昇降できる秘密だ。最新鋭の設備を誇った住友奔別炭鉱立坑槽(やぐら)。51メートルの高さは東洋一だった。

ピークの70年には142万トンを出炭したが、合理化のため翌年、閉山。悲劇はさらに続く。密封作業を終えたばかりの立て坑で、死傷者が出るほどのガス爆発が起きた。赤茶けた鉄骨は、壁板をはずすなどした事故処理の名残だ。

「夏草に覆われた壮大な墓標のよう」と往時の炭住街を思い出し、顔を曇らせる古老もいるが、今この「炭鉱遺産」が見直されている。

奔別炭鉱の場合、閉山後も工場や資材置き場などとして活用されたため、選炭工場、原炭ポケットなどの石炭生産システムがほぼそのままの形で残り、産業遺産としての評価が高い。

◆萱野駅

奔別の立て坑から南西に約10キロ離れた三笠市萱野の旧幌内線萱野駅。今年7月7日、駅の前庭に地元町内会や駅舎を宿泊所として利用したライダー約100人が集合し、焼き肉パーティーで駅の改修1周年を祝った。

石炭輸送のために三笠(幌内)と小樽(手宮)を結んだ道内最古の鉄道、幌内線。途中の萱野駅は1913(大正2)年に建てられ、石炭だけで

なく炭住街の主婦らが農作業アルバイトに訪れ乗降する駅としてにぎわった。同線は87年に廃止。駅舎は窓を鉄板でふさいで廃屋同然になった。

しかし、地域の住民が雪下ろしをするなど、建物を維持。そして昨年、町内会は「往時の姿を残す貴重な駅舎を残したい」として、積立金の一部を改修費に充てることを決めた。地元の建設会社も資材を提供。外壁を張り替え、屋根を塗った。ダルマストーブや洗濯機なども運び込まれライダーハウスとして利用できるようにした。

駅前に住む会社役員、坂梨宣行さん(50)が鍵を預かる。宿泊したライダーにジギスカンなどをふるまうこともあり、この1年間の利用者は70〜80人にのぼった。駅舎に置かれた1冊のノートに「あついてもてなしに感動しました」と、坂梨さんから地域への感謝の言葉があふれる。「遺産」がよみがえり、触れ合いの輪が広がった。

私と遺産

いつか観光資源に

炭鉱遺産を生かした地域づくりを目指し、空知支庁は98年度「そらち・炭鉱(やま)の記憶」事業をスタートさせた。集約した管内の炭鉱遺

産は、炭鉱関連施設・機械、歴史的建造物、鉄道関連施設、生活・文化財など198件。地域は三笠、夕張、岩見沢、美唄、赤平、滝川、歌志内など13市町におよぶ。

炭鉱遺産には、往時の炭住街でよく食べられた「なんこ料理」まで含まれている。馬の腸の煮込みで「鉱山、炭鉱文化として大切にすべき郷土料理」と付記されている。

支庁は「みかさ・炭鉱(やま)の記憶再生塾」「シューパロ塾(夕張)など、それぞれの地域で活動する市民グループの発足もサポートした。「三笠郷土史を学ぶ会」の会長だった解良(けら)守さん(67)は「再生塾」のリーダーだ。

塾はほぼ毎月「幌内を歩こう会」を行っている。草に覆われた坑口を見、ズリ山に登って炭鉱遺産に触れる試みだ。「地域ごとの塾ができ、旧産炭地が結びついた」と、高く評価する。

地元の中学生たちを連れて歩いたり、学校に出向いて街の歴史を語る。「見たことがないのだから『石炭とは』の話から入ることになる」「私たちの子供のころは選炭でどの川も真っ黒だったのに——」と、苦笑する。「すぐ観光資源にはならないだろうが、昔別に泊まって三笠、美唄などを巡ってもらおう。『なんこ』を食べながら古老の話を聞くななんてのもいい」。解良さんのつぶやきだ。